

日本のランの栽培の歴史 (レジュメ)

夏井高人

1 日本の古代における植物栽培の記録



縄文土器（国立歴史民族博物館所蔵）

日本の縄文時代には、南方系の人々が日本に住みつき、焼畑農耕によりイモやクリを栽培してそれを主食としていたことが考古学上の発見等により明らかとされている。日本の国土にある黒土（クロボク）は、1 万年以上も続いた焼畑農耕の連続によって蓄積された炭化有機物により形成されたと考えられている。おそらく、イモやクリだけではなく、非常に多くの種類の植物が南方から渡来して帰化し、日本国の野生植物の基礎の一部を形成したものと推定される。

なお、中部地方の高山地帯にある北方系の植物は、氷河期の残存物だと言われることが多い。しかし、縄文時代には現在よりも相当に高温・温暖な気候が支配しており、海水面も現在よりずっと高かったと推定されることから、少なくとも日本の本州に北方系の植物が生存できる場所は存在しなかったと推定される。現在ある北方系の植物の大半は、鎌倉時代をピークとする小氷期の時期に新たに北海道などから進出してきた植物と、古代の渡来人が植栽して栽培した植物の混合だと推定される。

しかし、この時代の園芸栽培に関する信頼できる文献資料はない。

1. 1 中国の史書（『三国志』の「魏書・東夷伝・倭國」（魏志倭人伝）など）



吉野ヶ里遺跡

『三国志』の「魏書・東夷伝・倭國」には、当時の邪馬台國にあったとされる植物の記載がある。栽培品なのか野生植物なのかの別については明記されていないけれども、植物の種類から考えて栽培品を列挙したものではないかと推定される。

其風俗不淫 男子皆露以木絛招頭其衣幅但結束相連略無縫 婦人被髮屈作衣如單被穿其中央貫頭衣之

種禾紵麻 蠶桑緝績 出細紵絛 其地無牛馬虎豹羊鵲 兵用矛楯木弓 木弓短下長上竹箭或鐵鏃或骨鏃 所有無與擔耳朱崖同

倭地温暖冬夏食生菜 皆徒跣 有屋室父母兄弟息異處 以朱丹塗其身體 如中國用粉也 食飲用豆手食

其死有棺無槨封土作冢 始死停喪十日 當時不食肉喪主哭泣他人就歌舞飲酒 已葬舉家詣水中澡浴以如練沐

其行來渡海詣中國恒使 一人不梳頭不去蝨衣服垢汚不食肉不近婦人如喪人名之持 若行者吉共顧其生口財物 若有疾病遭暴害便欲殺之謂其持不謹

出真珠青玉 其山有丹 其木有杼豫樟櫪投櫃烏號楓香其竹篠桃支 有薑橘椒荷不知以滋味 有猴黑雉

其俗舉事行來有所輒灼骨而卜以占吉凶先告所卜 其辭如令法視火占兆

→ 「艸－財産権としての植物 (1)」

1. 2 『古事記』



ガガイモ

『古事記』の上巻「大國主神」には、大國主神（大穴牟遲）と少彥名神（少名毘古那）とが力を合わせて国を造ったとの記載があるだけとなっている。

故 大國主神 坐出雲之御大之御前時 自波穗 乘天之羅摩船而 内剥鵝皮剥爲衣服 有歸來神 爾雖問其名不答 且雖問所從之諸神 皆白不知 爾多邇具久白言自多下四字以音 此者 久延毘古必知之 卽召久延毘古問時 答白 此者神產巢日神之御子 少名毘古那神 自毘下三字以音 故爾白上於神產巢日御祖命者 答告 此者 實我子也 於子之中 自我手俣久岐斯子也 自久下三字以音 故 與汝葦原色許男命 爲兄弟而 作堅其國

故自爾 大穴牟遲與少名毘古那 二柱神相並 作堅此國 然後者 其少名毘古那神者

度于常世國也 故顯白其少名毘古那神 所謂久延毘古者 於今者山田之曾富騰者也
此神者 足雖不行 盡知天下之事神也

(要旨)

大国主神（大穴牟遲）と少彦名神（少名毘古那）の二柱の神が共同統治してこの国の基礎を固めた。その後、少彦名神（少名毘古那）は常世の国に去った。

しかし、『古語拾遺』には大国主神（大己貴神）と少彦名神との関係についてもう少し詳しく書かれており、農耕・医療・畜産の神とされている。

大己貴神（一名大物主神 一名大國主神 一名大國魂神者 大和國城上郡大三輪神是也）與少彦名神（高皇產靈尊之子 通常世國也） 共戮力一心 經營天下 爲蒼生畜產定療病之方 又 爲攘鳥獸昆虫之灾 定禁厭之法 百姓至今 咸蒙恩賴 皆有效驗也

(要旨)

大己貴神（大物主神、大國主神、大國魂神者とも呼ばれ、大和國城上郡大三輪神社の神がこの神である。）と少彦名神（高皇產靈尊の子で、常世の国に去った。）は、力を合わせ、心をつにして天下を共同統治した。植物の栽培や畜産を行い、病氣療養の方法を定め、鳥獸や昆虫による害を避けるための方法を定めた。農民は、今日に至るまで少彦名神の御恩に感謝しており、その定めによる効能は明らかである。

このほか、『古語拾遺』には、古代における農業や林業等の産業が忌部氏（齋部氏）により行われたとの主張が記述されている。

仍 令天富命（太王命之孫也） 率手置帆負彦狹知二神之孫 以齋斧 齋鉏始採山材 構立正殿 所謂 底都磐根仁宮柱布都之利立 高天乃原爾搏風高之利 皇孫命乃美豆 乃御殿乎造奉仕也

故 其裔 今在紀伊國名草郡御木 鹿香二郷（古語 正殿謂之鹿香） 採材齋部所居 謂之御木 造殿齋部所居 謂之鹿香 是其証也

又 令天富命率齋部諸氏 作種種神寶 鏡玉矛盾木綿麻等 櫛明玉命之孫 造御祈玉（古語 美保伎玉 言祈也） 其裔 今在出雲國 每年與調物共貢進其玉 天日鷲命之孫 造木綿及麻并織布（古語 阿良多倍）

仍 令天富命率日鷲命之孫 求肥饒地遣阿波國殖穀麻種 共裔 今在彼國 當大嘗之年 貢木綿麻布及種種物 所以 郡名爲麻殖之縁也 天富命 更求沃壤 分阿波齋部率往東上 播殖麻穀 好麻所生 故 謂之總國 穀木所生 故 謂之結城郡（古語

麻謂之總 今爲上總下總二國 是也)

阿波忌部所居 便名安房郡(今安房國 是也) 天富命 即於其地立太玉命社 今謂之安房社 故 其神戶有齋部氏 又 手置帆負命之孫 造矛竿 其裔 今分在讃岐國 每年調庸之外 貢八百竿 是其事等証也

1. 3 『日本書紀』



溪谷の樹木に着生したムギラン（紀州・田辺市）

『日本書紀』卷第一の第八段には、第四の一書に曰くとして、五十猛神が日本国に数々の樹木の種子をもたらし、これを播種して植林を教えたことから緑豊かな国となったとの記述がある。

一書曰 素戔鳴尊所行無狀 故諸神 科以千座置戸 而遂逐之 是時 素戔鳴尊 帥其子五十猛神 降到於新羅國 居曾尸茂梨之處 乃興言曰 此地吾不欲居 遂以埴土作舟 乘之東渡 到出雲國簸川上所在 鳥上之峯 時彼處有吞人大蛇 素戔鳴尊 乃以天蠅斫之劔 斬彼大蛇 時斬蛇尾而刃缺 即擘而視之 尾中有一神劔 素戔鳴尊曰 此不可以吾私用也 乃遣五世孫天之葺根神 上奉於天 此今所謂草薙劔矣 初五十猛神 天降之時 多將樹種而下 然不殖韓地、盡以持歸 遂始自筑紫 凡大八洲國之内、莫不播殖而成青山焉 所以 稱五十猛命 爲有功之神 即紀伊國所坐大神是也

(要旨)

乱暴狼藉を諸々の神から叱責され高天原を追われた素戔鳴尊は、その子である五十猛神を連れて新羅国に降臨し、曾尸茂梨の所に居を構えたが、「この地にはいたくない」

と言って、東方に行く船に乗って出雲国簸川の高地にある鳥上の峯に到着した。五十猛神は、降臨に際して樹木の種子を持参していたが、新羅国の地に植えるのは植栽せず、筑紫から始めて大八州国の全域に植樹をして回った結果、至るところ緑の樹木で覆われるようになった。五十猛命は、植林の神とされ、紀伊國に坐する大神がこの神である。

[注記]

神話の一種としてとらえるのが普通だが、約 6000 年～7000 年前の鬼界カルデラ大噴火により西日本一帯が火砕流に襲われて無生物の地となった後、次第に緑が回復した様子に関する記憶が残されているものと解釈することは不可能ではない。また、数々の有用植物が幾度にもわたって古代の中国からもたらされたという歴史が集約的に述べられていると解釈する余地も十分にある。仮にそう解釈することが可能だとすれば、日本の自然林は、もともと植栽等による人工林としてはじまったという理解も可能となる。

日本書紀卷第十三 雄朝津間稚子宿禰天皇 允恭天皇



フジバカマ（らに）

二年春二月丙申朔己酉

立忍坂大中姫 爲皇后

（中略）

初皇后随母在家 獨遊苑中 時鬪鷄國造 從傍徑行之 乘馬而苙籬 謂皇后 嘲之曰
「能作乎 汝者也」（汝 此云那鼻苔也）

且曰 「壓乞 戸母 其蘭一莖焉」（壓乞 此云異提 戸母 此云靚自）

皇后則採一根蘭 與於乘馬者 因以 問曰 「何用求蘭耶」

乘馬者對曰「行山撥蟻也」 （蟻 此云摩愚那岐）
 時皇后結之意裏 乘馬者辭无禮 即謂之曰「首也 余不忘矣」
 是後 皇后登祚之年 覓乘馬乞蘭者 而數昔日之罪以欲殺
 爰乞蘭者 賴搶地叩頭曰 「臣之罪實當死 然當其日 不知貴者」
 於是 皇后赦死刑 貶其姓謂稻置



ノビル（あららぎ）



シュンラン（らん）

「まぐなき」 ヌカカの類？

ホシヌカカ	6月～10月
ヌノメモグリヌカカ	4月～5月

ミヤマヌカカ

夏～秋（山地）

みららに（馬鈴蘭・馬兜蘭）



フタバアオイ

1. 4 『扶桑略記』

『扶桑略記』の「推古天皇元年正月」には、四天王寺の附属施設として敬田院という区画が設けられ、その区画内で四天王寺の境内地の外に施薬院、療病院及び悲田院という3つの施設が建設されたとの記述がある。

四天王寺 法號荒陵寺 荒陵郷東建立 故以處村號寺

發願四大天王 故曰四天王寺

敬田院東西八町南北六町 乾角建施薬院 艮角悲田院 北中間建療病院 是三院在寺垣外

敬田院 斯地内有池 號荒陵池 其底深 青龍恒居處也

[注記]

八卦（易）では、艮（ごん）は西北を指し、乾（けん）は南を指す。従って、施薬院が建築されたのは敬田院の四角形の敷地の乾角（南角）で、悲田院が建築されたのは敬田院敷地の艮角（北西角）、療病院が建築されたのは敬田院敷地の北辺中央付近ということになる。

『日本書紀』にも施薬院に関する記述があるとの趣旨が書いてある書籍等がある。しかし、『日本書紀』の推古天皇元年には敬田院、施薬院、悲田院及び療病院

の記述はない。『今昔物語』巻第十一の「聖徳太子」にも四天王寺建立の由来は書かれているが、敬田院、施薬院、悲田院及び療病院の記述はない。

施薬院の実在性については長らく疑問視する見解が有力だった。しかし、リーフレット京都 No.311（2014 年 12 月）の京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館「発掘ニュース 111 施薬院の木簡」によれば、2014 年 1 月から 3 月まで、京都市南区東九条上殿田町で行われた平安京跡発掘調査の際に発見された木簡には施薬院に関する記述が含まれていた。このことから、現在では、古代の日本において施薬院という官庁が存在し、施薬院において薬草が栽培されていたこと、または、献上品である薬草が蓄積・貯蔵・処方されていたことそれ自体に疑問をもつ者はいない。この発掘地（京都市南区東九条上殿田町）は、鎌倉時代以降は九条家の領地となったが、それ以前の時代には「施薬院御倉」と呼ばれていたとのこと。ただ、この木簡は平安京に遷都した以降の平安時代のものであるため、飛鳥時代に当たる聖徳太子や推古天皇の時代に『扶桑略記』に書かれているような施薬院が実在したかどうかは未だはっきりしない。そもそも、聖徳太子が建立したという四天王寺の所在地（比定地）それ自体について諸説ある。

1. 5 『出雲國風土記』

→ 「延喜式（土御門本）にみえる石斛の産地」



備中神楽面「大国主命」（国立歴史民族博物館所蔵）

1. 6 『大同類聚方』

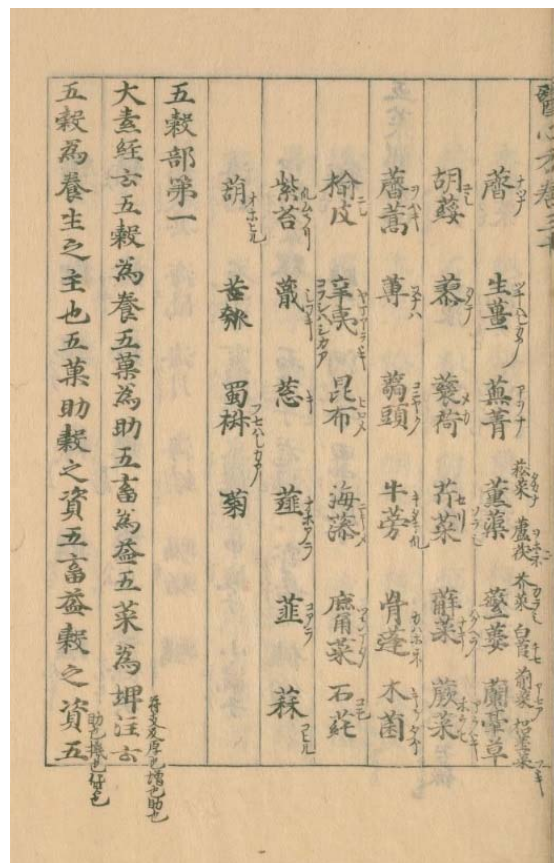
- 「比布利也未比（日震病）の薬方」
- 「保久利ー伝統的な有用植物の特定と法的課題」

1. 7 『本草和名』

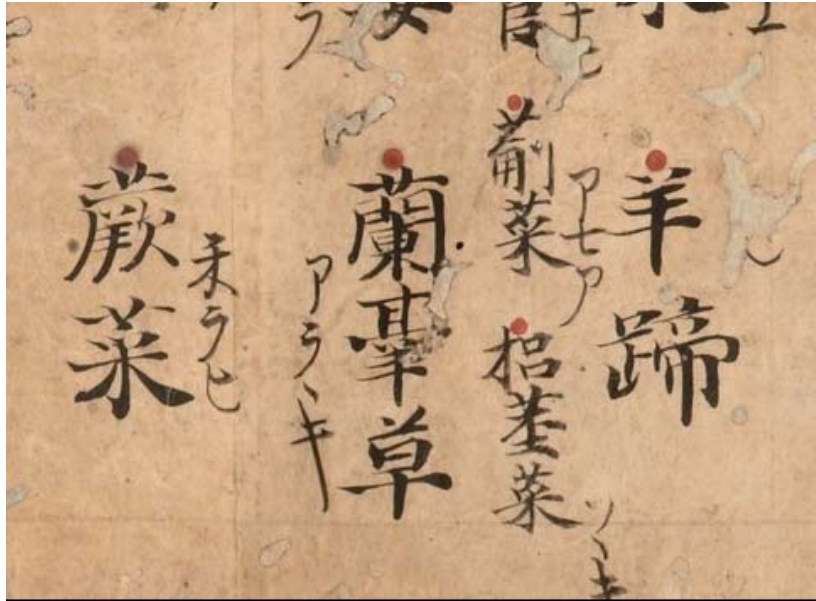
- 「保久利－伝統的な有用植物の特定と法的課題」

1. 8 『医心方』

- 「保久利ー伝統的な有用植物の特定と法的課題」
- 「比布利也未比（日震病）の薬方」



丹波康頼『医心方』(国立国会図書館蔵)



丹波康頼『医心方』（国宝：国立博物館所蔵）

1. 9 『延喜式』の「典薬寮」

→ 「延喜式（土御門本）にみえる石斛の産地」



霍山石斛

2 日本の中世における植物栽培の記録

慶応4年（1868年）の序のある『南蛮寺興廃記』には、織田信長が医学の心得のあるという南蛮人（ポルトガル人宣教師バテレンの弟子である宣教師をイルマンと呼んだらしい。）と謁見した際、イルマンから薬草園の開設を願う申出があり、これを許したことについての記述がある。

信長へ訴達メ曰ク天帝宗ハ普ク病難貧苦ヲ救テ起臥ヲ安シ法ヲ傳ヘテ現安後樂ノ願望ヲ成就ス 薬園ヲ給テ薬種ヲ植其備ヲ成シコトヲ願フ

信長許諾シテ山城近國ノ内其地ヲ選フヘシト有ケレバ 兩イルマン江州伊吹山ヲ願ヒ得 此山ニ登テ五十町四方切開キ薬園トシテ本國ヨリ三千種ノ薬草ノ苗種ヲ取來シム 伊吹山ニコレヲ植

今二百年ノ後迄モ其根此山ニ止テ川芎苳ノ類此山ヲ以テ名産トス

[注記]

この記述の真偽は不明だが、伊吹山産の川芎草すなわちセンキュウ（*Cnidium officinale*）等の植物が南蛮人によってもたらされ伊吹山への植栽によって増えた園芸植物だという由来伝承を示すものであることは、疑うべき余地がない。ただし、センキュウ（*Cnidium officinale*）は中国原産の植物なので、イルマンが本国から輸入したという薬草苗は、実際には中国から輸入されたものという可能性がある。真実は、江戸時代以降に中国から大量の植物苗が輸入され、植栽・播種・増殖されて漢方や蘭方で用いられたということであり、その由来をごまかすために南蛮人がもたらしたものだと言っている可能性は否定できない。このような解釈を採る場合でも、約 3000 種もの植物苗が輸入されたという記述の重みは無視できない。なぜなら、現時点における日本産野生維管束植物は約 7000 種とされており、イルマンが輸入したという約 3000 種との数は約 7000 種の半数近くに相当する数ということになるからだ。つまり、日本国内における主要な維管束植物の多くが過去に外国から輸入された薬草苗に由来する園芸種の子孫であり、野生種ではないという可能性がある。

伊吹山にはオオナンバンギセル（*Aeginetia sinensis*）が生える。中国原産の植物で、中国以外では日本にしかない。中国名を「野菰」という。「ナンバンギセル」は「南蛮人が用いる煙管」を意味する。この植物は、南蛮人が中国から日本へと輸入して伊吹山に種子を播種したもので、島原の乱以降におけるキリスト教の弾圧により伊吹山の薬園が閉鎖されるに伴い、宣教師（ポルトガル人）の弟子（日本人）が蘭方に用いるためその種子を伊吹山から全国各地に運搬して播種し、今日まで残存したものだという可能性がある。



イブキジャコウソウ

3 日本の江戸時代における植物栽培の記録

3.1 貝原益軒『大和本草』と森野藤助『松山本草』

- 「貝原篤信（益軒）『大和本草』の石斛」
- 「『松山本草』に収録されているラン科植物の図」



シラン

3. 2 江戸の園芸書

3. 2. 1 『花壇地錦抄』

3. 2. 2 『草花絵前集』



ほてい草（国立国会図書館所蔵）



南京えびね（国立国会図書館所蔵）



蘭（国立国会図書館所蔵）

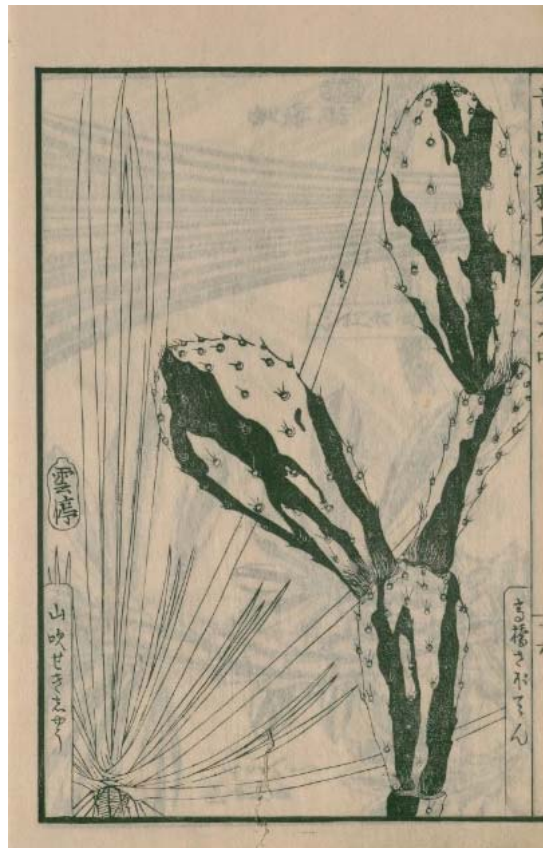
3. 2. 3 『草木奇品家雅見』



蘭（国立国会図書館所蔵）



とくさ（国立国会図書館所蔵）



団扇さぼてん（国立国会図書館所蔵）

3. 2. 4 『草木錦葉集』



（国立国会図書館所蔵）

3. 3 江戸の植物図鑑

3. 3. 1 『本草図譜』

→ 中国古文献にみえる石斛の産地



3. 3. 2 『阿淡産志』

→ 石斛と木斛

3. 3. 3 『本草通串證圖』

→ 「比布利也未比（日震病）の薬方」

3. 3. 4 『松山本草』

→ 「『松山本草』に収録されているラン科植物の図」

3. 3. 5 『訓蒙圖彙』



(国立国会図書館所蔵)

3. 3. 5 『繪本野山草』



3. 3. 6 小野蘭山『花集』



報春先（国立国会図書館所蔵）



鶴蘭（国立国会図書館所蔵）

3. 4 『救荒本草』

3. 5 諸国（諸藩）の『産物帳』

→ 「石斛と木斛」

4 明治維新—『府県物産志』



石斛（九州産）

明治6年（1873年）に開催されたウィーン万国博覧会の前年、博覧会出品の準備として、日本各地の物産調査が実施された。その調査結果は、『府県物産志』全7巻としてまとめられている。明治維新当時における全国各地の動植物及び農業の状況を知るための非常に貴重な資料だと思われる。

ただ、薬草を含め植物に関する記述は全体として非常に乏しい。その例外的として、①信州と岐阜県だけは異常に詳細に薬草等の品目が掲げられていること、②ラン科植物では、九州の対馬と大分県のみ異常に大量の石斛を産出しているとの記録があることは特筆すべきだと考える。後者の石斛は、極貧地域のゆえに野生の石斛を採取して産物として報告するくらいしかできなかったと解釈することも可能だが、そうではなく、自然の山野を利用して人為的・計画的に石斛が大量生産されていたと解釈するほうが妥当と思われる。

5 日本独自の文化と考えるべきか？



『長生草』（国立国会図書館蔵）

5. 1 『夢梁録』

『夢梁録』は、南宋の仮首都・臨安周辺の様子について、先行する文献等を多数引用しながらまとめた全 20 巻になる書物・著者の呉自牧は、1300 年ころの人だと推定されている。

『夢梁録』の巻十八には、当時園芸栽培されていた植物のことが書かれている。そこには、次のような植物（花卉）の名がある。

- 牡丹（ぼたん）
- 芍薬（しゃくやく）
- 梅花（うめ） ※白梅のことか？
- 紅梅（うめ）
- 蠟梅（ろうばい）
- 桃花（もも）
- 杏子（あんず）
- 玉簪（ぎぼうし）
- 水仙（すいせん）

薔薇（ばら）
徘徊（はまなす）
百合（ゆり）
滴滴金（おぐるまそう）
石竹（せきちく）
木香（もっこうばら）
桜桃花（ゆすらうめ）
萱草（きすげ）
梔子（くちなし）
山丹（やまゆり）
翦紅羅（せんろう）
錦帯（うつぎ）
笑靨（しじみばな）
菊（きく）
荷花（はす）
瑞香（じんちょうげ）
紅辛夷（べにこぶし）
蕙（けい） ※シュンラン属（*Cymbidium*）か？
蘭（らん） ※シュンラン属（*Cymbidium*）か？
紫薇花（さるすべり）
紫楊（あじさい） ※紫陽ではなく紫楊
紫荊花（はなずおう）
鷄頭（けいとう）
鳳仙（ほうせんか）
杜鵑（つつじ）
蜀葵（あおい）
映山紅花（やまつつじ）
罌粟（けし）
榴花（ざくろ）
山茶（つばき）

山野で採取される薬草（本草）は多数掲げられているが、蘭と関連するものとしては、次のようなものがある。

澤蘭（たくらん） ※フジバカマ属（*Eupatorium*）
白芨（びゃっきゅう） ※シラン属（*Bletilla*）

5. 2 『蘭譜』

中国には植物（花卉）についてまとめられた書籍が多数ある。例えば、宋代には、欧陽脩『洛陽牡丹記』、張邦基『陳州牡丹記』、陸游『天彭牡丹譜』、王觀『揚州芍藥譜』、范成大『范村梅譜』、范成大『范村菊譜』、そして、趙時庚『金漳蘭譜』と王貴學『王氏蘭譜』がある。

5. 2. 1 『金漳蘭譜』

趙時庚『金漳蘭譜』には次のようなくだりがある。

陳夢良 色紫 每干十二萼 花頭極大 為眾花之冠 至若朝暉微照 曉露暗濕 則灼然騰秀 亭然露奇 斂膚傍干 團圓心向 婉媚綽約 仁立凝思 如不勝情 花三片 尾如帶微青 葉三尺 頗覺弱 翠然而綠 背雖似劍脊 至尾棱則軟薄 斜撒粒許帶緇 最為難種 故人稀得其真

吳蘭 色深紫 有十五萼 干紫英紅 得所養則岐而生 至有二十萼 花頭差大 色映人目 如翔鸞翥鳳 千態萬狀 葉則高大 剛毅勁節 蒼然可愛

潘花 色深紫 有十五萼 干紫 圓匝齊整 疏密得宜 疏不露幹 密不簇枝 綽約作態 窈窕逞姿 真所謂艷中之艷 花中之花也 視之愈久 愈見精神 使人不能舍去 花中近心 所色如吳紫 艷麗過於眾花 葉則差小於吳 峭直雄健 眾莫能比 其色特深 或云仙霞 乃潘氏西山於仙霞嶺得之 故人更以為名

趙十四 色紫 有十五萼 初萌甚紅 開時若晚霞燦日 色更晶明 葉深紅 合於沙土則勁直肥聳 超出群品 亦云趙師傅 蓋其名也

何蘭 紫色 中紅 有十四萼 花頭倒壓 亦不甚綠

金殿邊 色深紫 有十二萼 出於長泰陳家 色如吳花 片則差小 干亦如之 葉亦勁健 所可貴者 葉自尖處分二邊 各一線許 直下至葉中處 色映日如金線 其家寶之 猶未廣也

濟老 色白 有十二萼 標致不凡 如淡妝西子 素裳縞衣 不染一塵 葉與施花近似 更能高一二寸 得所養則岐而生 亦號一線紅

灶山 有十五萼 色碧玉 花枝開 體膚松美 顚顚昂昂 雅特閒麗 真蘭中之魁品也 每生並蒂花 乾最碧 葉綠而瘦薄 開花生子 蒂如苦蕒葉相似 俗呼為綠衣郎 黃郎 亦號為碧玉幹

施花 色微黃 有十五萼 合並乾而生 計二十五萼 或迸於根 美則美矣 每根有萎 葉朵朵不起 細葉最綠微厚 花頭似開不開 乾最高而實貴瘦 葉雖勁而實貴柔 亦花中之上品也

李通判 色白 十五萼 峭特雅淡 迎風浥露 如泣如訴 人愛之 比類鄭花 則減頭低葉小絕佳 劍脊最長 真花中之上品也 惜乎不甚勁直

惠知容 色白 有十五萼 賦質清臈 團簇齊整 或向或背 嬌柔瘦潤 花英淡 片色尾凝黃 葉雖綠茂 細而睹之 但亦柔弱

馬大同 色碧而綠 有十二萼 花頭

鄭少舉 色白 有十四萼 瑩然孤潔 極為可愛 葉則修長而瘦 散亂 所謂蓬頭少舉也 亦有數種 只是花有多少 葉有軟硬之別 白花中能生者 無出於此 其花之色姿質可愛 為百花之翹楚者

黃八兄 色白 有十二萼 善於抽干 頗似鄭花 惜乎乾弱 不能支持 葉綠而直

周染 花色白 十二萼 與鄭花無異 第乾短弱耳

夕陽紅 花八萼 花片微尖 色則凝紅 如夕陽返照

觀堂主 花白 有七萼 如聚如簇 葉不甚高 可供婦人曉妝

名第 色白 有五六萼 花似鄭 葉最柔軟 如新長葉則舊葉隨換 人多不種

青蒲 色白 有七萼 挺肩露骨 甚類灶山 而花潔白 葉小而直 且綠 只高尺五六寸

弱腳 只是獨頭蘭 色綠 花大如鷹爪 一乾一花 高二三寸 葉瘦 長二三尺 入臘方花 薰馥可愛而有餘

魚魷蘭 十二萼 花片澄徹 宛如魚 採而沉之水中 無影可指 則頗勁 綠 白蘭之奇品

也

[注記]

一般に、陳夢良吳蘭、潘花、趙十四、何蘭は、墨蘭 (*Cymbidium*) の一種と考えられている。主にカンラン (*Cymbidium kanran*) やホウサイラン (*Cymbidium sinense*) のような特徴を示し、赤色～紫色系～暗褐色の花を咲かせる蘭を指すものと推定される。

金殿邊は、キンリョウヘン (*Cymbidium floribundum*) を指す。

濟老、灶山、施花、李通判、惠知容、馬大同、鄭少舉、黃八兄、周染、夕陽紅、觀堂主、名第、青蒲、魚魴蘭は、スルガラン (*Cymbidium ensifolium*)、イッケイキュウカ (*Cymbidium faberi*)、シュンラン (*Cymbidium goeringii*) のような特徴を示し、緑色～黄色～白色の花を咲かせる蘭を指すものと推定される。

弱脚 (獨頭蘭) は、日本産のもののように1茎に1花だけ開花させるタイプのシュンラン (*Cymbidium goeringii*) を指すと思われる。

5. 2. 2 『王氏蘭譜』

『王氏蘭譜』には次のようなくだりがある。

涪翁曰 楚人滋蘭九畹 植蕙百畝 蘭少故貴 蕙多故賤
予按 本草 薰草亦名蕙草 葉白 蕙根曰薰 十二畝為畹 百畝自是相等
若以一乾數花而蕙賤之非也 今均目曰蘭 天下深山窮谷 非無幽蘭 生於漳者、既盛
且馥、其色有深紫 淡紫 真紅 淡紅 黃白 碧綠 魚魴
金錢之異 就中品第 紫蘭陳為甲 吳潘次之
如趙如何如大小張淳監糧趙長秦 紫蘭景初以下 又其次
而金梭邊為紫袍奇品 白蘭灶山為甲 施花惠知客次之 如李如馬如鄭如濟老十九蕊黃
八兄周染以下 又其次
而魚魴蘭為白花奇品 其本不同如此
或得其人 或得其名 其所產之異其名 又不同如此

涪翁曰 蘭蕙叢生 蒔以沙石 則茂 沃以湯茗 則芳
予於諸蘭非愛之大過 使之碩而茂 密而蕃 蒔沃以時而已
一陽生於子 根莖正稚 受肥尚淺 其澆宜薄 南薰時來 沙土正漬 嚼肥滋多 其澆
宜厚
秋七八月預防水霜 又以濯魚肉水或穢腐水 停久反清 然後澆之
人力所至 蓋不萌者寡矣

[注記]

日本では『楚辞』の蘭をキク科ヒヨドリバナ属のフジバカマ (*Eupatorium japonicum*) だと理解するのが中国文学及び国文学上の通説になっている。しかし、中国宋代の蘭譜では、ラン科シュンラン属 (*Cymbidium*) の植物だと明言しているところに注目すべきだろう。しかも、蕙蘭は地面に植えて大量に栽培されるものなので、あまり珍重されていないと指摘されている点には特に注目すべきではないかと思われる。

→ 『孔子家語』の蘭

→ 『荀子』の蘭

5. 3 『食物本草』

5. 4 日本の場合



『人倫訓蒙圖彙』(国立国会図書館所蔵)

そして・・・

享保7年（1722年）、江戸染井の花屋十兵衛の庭に一夜にした珍花が生じた。花屋十兵衛は、この植物の名前がわからないとして、幕府に上申した上で許可を得て「花の名前を知っている者は教えてほしい」と刷り物を配布した。その結果、これを一目見ようと夥しい数の人々が押し寄せたらしい。ところが、その後、幕府が調査した結果、この植物が美濃にはたくさん生えているものだということが判明し、花屋十兵衛は閉門（無期謹慎の処分）を申付けられた。幕府としては、花屋十兵衛が美濃からこの植物の苗を運んできて庭に植え、客寄せのための宣伝広告の一種として刷り物をばらまいたのだと判断したのではないと思われる。

現代で言えば誇大広告の一種ということになり、消費者保護関連の法律と抵触する行為ということになるかもしれない。



『琉球植物志』（国立国会図書館蔵）



梵浄山石斛

【参考文献】

- 大場秀章『大場秀章著作選Ⅰ 植物学史・植物文化史』（八坂書房、2006）
- 北村四郎『北村四郎選集Ⅱ 本草の植物』（保育社、1985）
- 木村陽二郎編『白井光太郎著作集第Ⅲ巻 園芸植物と有用植物』（科学書院、1986）
- 笹山三次編『蘭譜』（改造社、1932）
- 笹山三次・永野芳夫『東洋蘭譜』（加島書店、1957）
- 安藤三『長生蘭』（日本長生蘭協会、1980）
- 小笠原左衛門尉亮軒『江戸の花競べー園芸文化の到来』（青幻舎、2008）
- 浜崎大『江戸奇品解題』（幻冬舎ルネッサンス、2012）
- 浜崎大『江戸奇品図鑑』（幻冬舎ルネッサンス、2013）
- 浜崎大『江戸奇品雑記』（幻冬舎ルネッサンス、2014）
- 三之丞伊藤伊兵衛・伊藤伊兵衛（加藤要校注）『東洋文庫 288 花壇地錦抄 草花絵前集』（平凡社、1976）
- 佐藤武敏編訳『東洋文庫 622 中国の花譜』（平凡社、2009）
- 呉自牧（梅原郁訳）『東洋文庫 681 夢梁録 3ー南宋臨安繁盛録ー』（平凡社、2000）
- 兼重護『シーボルトと町絵師慶賀ー日本画家が出会った西欧』（長崎新聞社、2003）
- 白幡洋三郎『プラントハンターーヨーロッパの植物熱と日本』（講談社、1994）
- 傅維康（主編）・川井正久（編訳）『中国医学の歴史』（東洋学術出版社、1997）
- 山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界 上』（思文閣、1995）
- 山田慶兒編『東アジアの本草と博物学の世界 下』（思文閣、1995）
- 白井光太郎『植物渡來考』（岡書院、1929）
- 服部敏良『奈良時代醫學の研究』（霞が関出版、1980）
- 久志本常孝『神宮醫方史』（文栄社、1985）
- 満久崇麿『仏典の植物事典』（八坂書房、2013）
- 佐藤洋一郎・赤坂憲雄編『イネの歴史を探る』（玉川大学出版部、2013）
- 浜田晋介『弥生農耕集落の研究ー南関東を中心にー』（雄山閣、2011）
- 遠藤邦彦『日本の沖積層ー未来と過去を結ぶ最新の地層ー』（富山房インターナショナル、2015）
- 山野井徹『日本の土ー地質学が明かす黒土と縄文文化』（築地書館、2015）
- 関西大学経済・政治研究所研究双書第 100 冊『府県物産志ー影印と研究』（1996）
- 周祖亮・方懿林『簡帛醫藥文獻校釋』（学苑出版社、2014）
- 八坂書房編『日本植物方言集成』（八坂書房、2001）